

のぞえ
野添遺跡

所在地 豊橋市石巻本町西下地
(北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒)
調査理由 道路改良工事(主)東三河環状線
調査期間 平成25年11月～平成26年3月
調査面積 2,000㎡
担当者 松田 訓



調査地点(1/2.5万「豊橋」)

調査の経過 調査は、愛知県建設部による主要地方道東三河環状線改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成25年11月から平成26年3月にかけて実施した。調査区は三分割し、13A区・13B区・13C区として実施した。調査面積は、2,000㎡である。

立地と環境 遺跡は豊橋市北部に所在し、豊川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区は河岸段丘上の縁辺部に位置し、南側及び東側は神田川沿いの低地へと落ちる段丘崖となっている。調査地点の南東側約200mの位置には、神田川沿いの低地に弥生時代中～後期、中世を主体とした東下地遺跡が展開する。

調査の概要 今回の調査では、古代の土坑、竪穴建物、中世の溝等が確認された。この中で竪穴建物の可能性が考えられる遺構は、8基以上検出された。平面形態は楕円形を呈する1基を除いて隅丸方形を呈し、規模は一辺3～4mであった。主軸は方位から極端に偏向しないものが多く、3基は北側の辺がわずかに突出し、カマドの袖が基底部のみ観察されたり焼土がわずかに認められた。いずれも検出された深さは浅く、灰釉陶器碗、土器甕などがわずかに出土している。こうした竪穴建物跡の検出状況から、平安時代には段丘上の縁辺部において、集落が存在したことが想定される。

まとめ 調査地点の北側から中央東側にかけては、直線的な溝が検出された。断面形状は逆台形を呈しており、平面で確認できる主軸は、およそN-22°Eを示す。検出面における規模は、長さ約45m、幅2.5～3m、深さ1.2～1.5mを測る。出土遺物はわずかであったが、基底部にあたる位置からは、無高台の山茶碗が出土している。約20m西側には、旧別所街道がこの溝と並行して通っており、溝を設ける目的、台地縁辺部での土地利用の仕方など、街道との位置関係も考慮しながら評価することが課題である。

(松田 訓)



調査区遠景(南より)



13A区1050SI

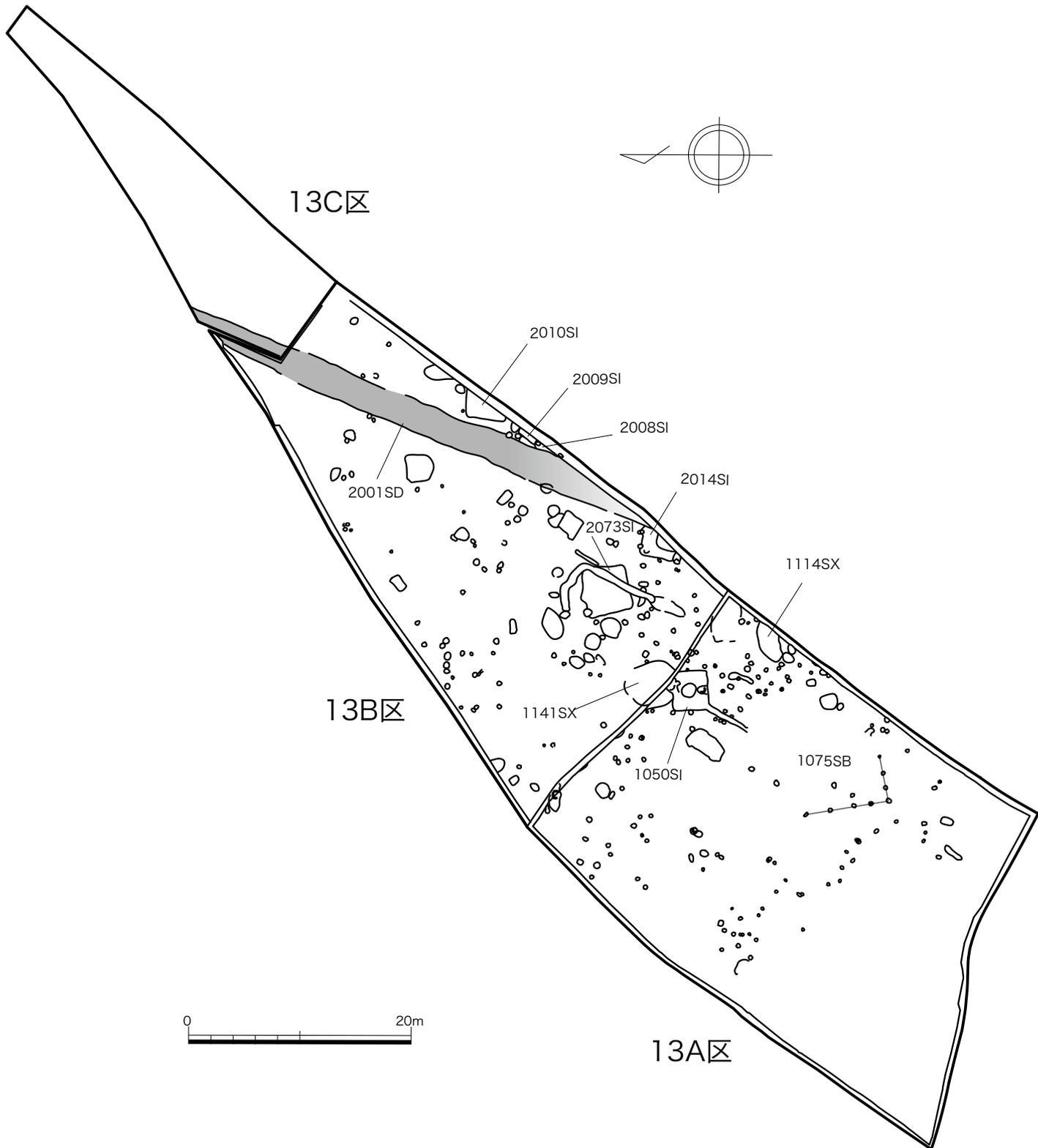


图1 野添遺跡 主要遺構配置図 (1:500)